書き抜き読書ノート 2470　　2022 年 1 月 4 日

宇野重規著「民主主義のつくり方―習慣の力―」筑摩選書 0076、筑摩書房 2013 年 10 月 15 日刊を読む

Ⅰ　自己修正する習慣

1．(1)ちなみにパースは、このような宇宙の生成変化を論じるにあたって習慣を重視したが、それと同時に、学習された人間の行動様式という、より狭い意味でもこの言葉を用いている。
(2)とはいえ、その場合も、パースは習慣を型にはまった行動というような意味では捉えていない。

2．(1)パースはここで面白い言葉を使っている。
(2)すなわち、彼によれば、習慣とは〈would be〉と深く結びついているという。
(3)すなわち、「もし～なら、このような仕方で行動する準備ができている」ということこそが、習慣なのである。

3．(1)ここで重要なのは、習慣が過去からのしがらみよりはむしろ、未来における行動との関連で意味をもっていることである。
(2)言い方を変えれば、ここでいう習慣とは、いつの間にか身について、変えることのできなくなった習癖ではない。
(3)むしろ、未来においてある状況に遭遇した場合に、あらためて考えるまでもなく「このように行動するであろう」と言い切れることが重要なのである。

4．(1)例えば熟練した船長であれば、海上でいかなる暴風に出遭っても、慌てることなく適切な指示を出すことができるだろう。
(2)このような意味で、未来においていかなる状況が現れるにせよ、その人の行動がある程度予測可能であるとき、それは習慣によるものなのである。

5．(1)さらにパースは、「習慣変更(habit-change)」というアイディアも示している。
(2)「習慣変更とは以前の経験からあるいは以前に人が実際にかれの行為や意志を行使したことから結果し、またはこれらの両種のものの複合から生ずるところの、行動に対する人間の傾向を修正することを意味する」。

6．(1)このように、パースにとっての習慣はいったん定着すれば、以後絶対に変わらないものではなかった。むしろ、習慣の実践の結果生じた結果を踏まえて、人は習慣をたえず修正していく。むしろ、習慣の実践の結果生じた結果を踏まえて、人は習慣を絶えず修正していく。
(2)その意味で習慣には、自己修正的・自己批判的な要素が含まれている。パースは習慣における科学的・合理的側面を強調したといえるだろう。

7．(1)その場合も、個別的な結果で習慣が変わることはない。むしろ「もし～なら、このような仕方で行動する」という一般的命題が重要なのであり、それはあたかも、科学者が自らの仮

説を絶えざる実験によって検証しながら修正していくのに似ている。
（2）このように、習慣における自己修正の契機を強調している点に、プラグマティズム（あるいはプラグマティシズム）らしい特性を見出すことができるだろう。

8．（1）このように習慣とは、人間による学習された行動様式であるが、それは不断に検証され、修正されていくものである。
（2）言い換えれば、そのような状況が生じた場合にただちに行動する準備ができているという意味で、定着し性向になった行動様式である一方、つねに変化に対して開かれているのが習慣である。
（3）いわば習慣とは、定着・安定と修正・変化の両側面を伴った媒体なのである。

Ⅱ　知は社会的である

1．（1）パースが問題にしたのは結局のところ、偶然性にみちみちたこの世界で、私たちは何を知ることができるのかという問いであった。
（2）人間の知覚は不可避的に誤りをおかす。
（3）一人ひとりは違ったかたちで物事を知覚するのであり、しかも知覚される事象の方もつねに変化している。

2．（1）この世界において、同じことが正確に繰り返されることはけっしてない。
（2）そうだとすれば、私たちの信念もまた一つの賭けに過ぎない。
（3）私たちの信念とは、物事がこのように振る舞うであろうという予測に過ぎない。
（4）それは絶えず、経験によって検証されていく。

3．（1）パースが着目したのは、人間の知識がつねに社会的であるという点である。
（2）個々人の信念は不完全である。
（3）一人ひとりの心はけっして真の実在を映し出す鏡ではない。
（4）鏡であるとしても、そこに映し出されるのは、まったく別の事物の姿である。

4．（1）そうだとすれば、知識とはそもそも一個人の推論に根拠をもつものではない。
（2）むしろ、つねに知識は社会的なものでしかありえない。
（3）人々の推論がぶつかり、修正し合うなかで、知識は生まれてくる。
（4）その意味で、「論理は、社会的な信念のなかにこそ、その基礎を有している」と、パースは論じた。習慣は社会的な信念として人々に共有され、受け継がれていくものであった。

5．このように、知識とはつねに社会的なものであり、習慣とは社会的信念が結晶化したものであるというパースの考え方こそが、根底において、プラグマティズムの習慣論を支えたのである。

P121 ～ 124

＜コメント＞
宇野重規先生による「習慣の力」の議論は示唆に富みます。米国沿岸測量局などで測量の仕事をしながら執筆活動をつづけたサンダース・パースの紹介は有難い。

2022 年 1 月 4 日　林明夫記